

1. 「ペルー南海岸・インヘニオ谷における考古学調査」

山本睦（山形大学）

松本雄一（山形大学）

坂井正人（山形大学）

ホルヘ・オラーノ（山形大学）

ヨシミツ・ホイヨ(山形大学ナスカ調査団)

山形大学の調査チームは 2013 年より、ペルー南海岸のインヘニオ河谷において集中的な考古学調査をおこなっている。本発表の目的はインヘニオ谷におけるここまでの成果を総括し、今後の展望を提示することである。

インヘニオ谷の上・中流域で行われた一般調査によって、形成期後期に対応するパラカス中期（紀元前 500-400 年）から後期中間期に対応するイカ期（紀元後 1000-1400 年）にいたるまでのセトルメント・パターンのデータがえられた。その結果、ナスカ期（紀元前 100-紀元後 600 年）にとくに重要な変化が起こったという見通しがえられた。パラカス中期から増加を続けた遺跡数はナスカ前期にその頂点に達し、中期から後期にかけて急激に減少しているのである。このようなセトルメント・パターンの変化とナスカ社会における社会変化がどのように関わっていたのか。この点を考察するため、インヘニオ谷における最も重要なナスカ期の遺跡、ベンティーヤ遺跡の調査が実施された。

地上絵によって知られているナスカ社会であるが、その地上絵が集中的に分布するナスカ台地をはさんで、ナスカ谷のカワチとインヘニオ谷のベンティーヤという大遺跡が位置している。カワチに関しては、長期にわたる発掘調査と土器分析の成果にもとづいて、パラカス期からナスカ期（紀元前 500-紀元後 500 年）における中心的な祭祀・巡礼センターであったと考えられている。その一方、ベンティーヤ遺跡でこれまでに実施されたのは踏査のみであり、その実態はいまだ謎に包まれている。しかし、その例外的な規模、カワチとの配置関係を考えるとナスカ社会において極めて重要な遺跡であったことは明白である。2014～2015 年の現地調査では、ベンティーヤ遺跡の各建造物の機能や関係性、編年の位置づけの同定に焦点が当てられた。

2. 「ビスカパルカ地域とワンカ・ハサ遺跡における調査」

土井正樹（日本学術振興会特別研究員 PD,山形大学）

マリルー・マルティネス・ゴメス（トリゴパンパ村考古学調査プロジェクト共同責任者）

ペルー中央高地南部のアヤクーチョ谷は、ペルーを中心とする中央アンデス地域の編年において中期ホライズンと呼ばれる時期にワリ国家が成立した地域として知られている。ワリ国家に特徴的な建築や土器は、ペルー山岳部を中心に広く分布している。これまでの

ワリ国家に関する研究は、そのようなワリ国家に関連する建築や土器の広がり、ワリ国家の帝国性を示しているのか否かを明らかにすることを目的とするものが中心であり、ワリ国家の成立過程の解明を目的とする研究は少ない。

発表者は、ワリ国家の形成から崩壊にいたるまでの過程の解明を目的とし、2002 年と 2003 年にアヤクーチョ谷に位置する、トリゴパンパ村に存在する 3 遺跡、ワンカ・ハサ遺跡、タンタ・オルホ遺跡、クルス・パタ遺跡において発掘調査を実施した。その結果、ワンカ・ハサ遺跡からは、ワリ国家の成立直前期に相当する時期に、アヤクーチョ谷のワルパ社会とペルー南海岸のナスカ社会との間の交流が活発化したことを示唆する資料が得られた。かつては、ワリ国家形成のきっかけとしてティティカカ湖南東岸を中心とするティワナク社会からアヤクーチョ谷社会への影響が重視されてきたが、最近では、ワリ国家形成の要因としてワルパ社会とナスカ社会の交流の重要性が認識されつつある。

このワルパ社会とナスカ社会との交流のあり方の解明の鍵となると考えているのが、ワンカベリカ州のチュパ-ビスカパルカ遺跡とアヤクーチョ谷のワンカ・ハサ遺跡である。チュパ-ビスカパルカ遺跡は、アヤクーチョ谷と南海岸のほぼ中間の標高約 3370m のビスカパルカ地域に位置し、ここからはナスカ文化の土器が出土している。ナスカ文化の土器が出土している遺跡としては最も標高が高く、さらにアヤクーチョ谷と南海岸のほぼ中間という地理的位置から、ワルパ社会とナスカ社会の交流の様子を解明するには適した遺跡であると考えられる。一方、ワンカ・ハサ遺跡からは、ナスカ文化の土器との関係を示すワルパ文化の土器が出土している。本発表では、ビスカパルカ地域において実施した踏査と、ワンカ・ハサ遺跡において実施した発掘調査の成果について報告する。

3. 「ペルー北海岸・北部中央海岸沿岸部における遺跡の広域踏査：遺跡立地と漁撈、神殿建築」

荘司一步（総合研究大学院大学博士後期課程）

本発表は、ペルー北海岸および北部中央海岸沿岸部でおこなった広域踏査の結果を提示し、形成期における遺跡立地と魚類利用の地域差を考察するものである。これまでのアンデス形成期研究は、アンデス山脈から太平洋にそそぐ、河川流域を単位として行われる傾向にあった。そのため、標高にともなう東西方向の環境や資源の差異および遺跡間交流に関して、研究蓄積が厚い。一方で南北方向の地域差に関して焦点を当てた研究は決して多くない。とくに、沿岸部の遺跡は、南北に広がって分布するにも関わらず、海産資源の利用や物質文化の地域差について焦点が当てられてこなかった。

こうした問題意識のもと、2014 年と 2015 年にペルー北海岸および北部中央海岸沿岸部に位置する形成期遺跡の踏査を行った。その結果、ラ・リベルタ州とアンカシュ州の

境界に位置するサンタ川をはさんだ南北で、遺跡の立地に差異が認められることが明らかになった。具体的に述べれば、サンタ川以北では、標高 10m~20m 程度の低い海岸段丘に遺跡が立地するのに対し、サンタ川以南では、標高 20m~40m 程度の海岸線にせり出した小高い山の裾野に立地する。

加えて発表者はこの遺跡立地の差異を検証するため、各遺跡から出土した魚骨資料のデータを収集し、概観した。その結果、これまで注目されてきたカタクチイワシの優先的な利用を示す遺跡に加えて、サメ類を優先的に利用する遺跡が一定数存在し、両者はサンタ川をはさんで一定の地理的まとまりを持って分布していることがわかった。

このように、漁撈と遺跡立地の点からみて、サンタ川の南北では地域的な差異がみられる。さらに、これらの地域的な差異は、各遺跡にみられる物質文化や遺跡間交流のあり方と密接であった可能性がある。なぜなら両地域には基壇を伴うような神殿建築の出現過程に差異が認められるためである。

以上のように本発表では、遺跡立地、魚類利用、神殿建築の点から、サンタ川をはさんだ南北の海岸地域における形成期の地域差を考察する。

4. 「海岸カハマルカと呼ばれる土器群について-中期ホライズン期中央アンデスの社会動態-

渡部森哉（南山大学）

アンデス考古学において「海岸カハマルカ」と通称されてきた土器群がある。オレンジ色の胎土で内面と外面口縁部を白く塗り、内面にオレンジ色で彩紋した、低い高台付きの碗形土器である。器形と文様の特徴がカハマルカ盆地を中心に分布するカハマルカ様式の土器と類似しているが、主に海岸地帯で見つかったため、海岸カハマルカと呼ばれてきた。この土器の製作が始まったのは中期ホライズン期であり、カハマルカ盆地の土器編年ではカハマルカ中期 B に対応する。本発表ではこの土器群を手がかりに中期ホライズン期（後 700-1000 年）に生じた社会動態について考察する。

一般に土器は編年の基礎となり、また相互交流域を推定する手がかりとなる。ある特定の土器がその中心地から離れた場所で出土する場合、搬入品、あるいは影響を受けて製作されたと解釈される場合が多い。一方、アンデス考古学ではしばしば特定の民族集団と特定の土器様式が結びつけられて想定されることがあった。例えば前期中間期のはじめから現れるガジナソ文化の土器群はモチエ文化、シカン文化と平行して存続したとされる。長期間にわたって特定の土器様式が存続するという同様のパターンは海岸カハマルカにも認められ、ワリ帝国の時期に現れ、その後のシカン国家の下でも存続したと考えられる。大きな違いは、それぞれの土器の製作開始時において、ガジナソ様式土器が個別の社会・文化の指標とされるのに対し、海岸カハマルカがより大きな政体の下で出現したということ

である。本発表では、海岸カハマルカはワリ帝国がペルー北部に進出したのとはほぼ同じ時期に出現することを発表者の発掘データを基に示す。次にワリ帝国が後のインカ帝国と同様に多民族国家であったと考えられ、「海岸カハマルカ」が特定の間人集団の指標となる可能性を検討する。さらに「海岸カハマルカ」の事例から、アンデスにおける国家システムの特徴を考察する。

5. 「ホンジュラス共和国 ラス・ピラス遺跡出土のモザイク石彫復元」

平尾雅代（金沢大学大学院博士後期課程 日本学術振興会特別研究員 DC2）

南東マヤ地域で見られる特徴の一つとして、モザイク状の石造彫刻による建造物装飾が挙げられる。中心都市であるコパンでは、1985 年から始まった「コパン・モザイク石彫プロジェクト」によって、多くのモザイク石彫が復元された。その結果、建物の機能やモチーフの意味、建造物を所有している人物の職業や官職、コパンの階層など多くの示唆を与えた。

しかし、モザイク石彫研究はコパンのみを対象とし、コパン周縁の地方センターのモザイク石彫については研究の目が向けられず、図像学の視点に立ったモチーフ解釈に注力されてきたため、考古学的な根拠に基づく解釈や、復元そのものの重要性について着目する研究はされてこなかった。発掘調査報告書や論文において、簡単な出土状況図と復元図が掲載されているものもあるが、出土位置と復元位置の関係性を明示しているものはなく、参考比較する上で限界がある。

コパン周縁の地方センターでも様々なモザイク石彫の存在が確認されているが、明確な作成・使用時期は分かっていない。ただ、複合建造物の土器あるいは C14 測定による各建造シークエンスの建造時期、表現されるモチーフや、コパンと地方センターの関係の変化などから、少なくとも 8 世紀後半以降に作成され、装飾されていたのではないかと推測されている（中村 1997:171）。中でも、集中発掘が行われ復元可能な状況にある地方センターは、キリグア、リオ・アマリージョ、自身が調査に参加したラス・ピラスだけである。

1994 年から 1997 年にかけて中村誠一氏を団長としたラス・ピラス遺跡発掘調査で出土した約 800 点のモザイク石彫の内、一括出土したものを資料として使用した。コパンやキリグア出土のモザイク石彫などを参考にしながら、出土地点と復元位置の関係を明示し、実際に復元し、地方センターの復元の一指標となる資料を作成した（写真 1）。



写真 1 ラス・ピラス遺跡 人物像復元

6. 「二度の大噴火とサン・アンドレス遺跡：2015 年の発掘調査から」

市川彰（名古屋大学高等研究院）

本発表では 2015 年に実施したエルサルバドル共和国サン・アンドレス遺跡の調査成果の概要を報告する。サン・アンドレス遺跡はエルサルバドル共和国中央部に広がるサポティタン盆地に所在する、当該地域の中心的センターである。サポティタン盆地は、イロパンゴ火山灰（後 400～535 年頃）、ロマ・カルデラ火山灰（後 650 年頃）、ボケロン火山灰（後 1000 年頃）、プラヨン火山灰（後 1658 年）が観察することができる火山噴火と人間社会の関係を明らかにしようとするうえでは恰好のフィールドでもある。1980 年代以降、ロマ・カルデラ火山の噴火によって埋没したホヤ・デ・セレン遺跡の調査研究が推進されたが、サン・アンドレス遺跡は 1940 年代、1990 年代に局所的な発掘が行われた程度で、同遺跡の変遷や地域間交流などについては断片的な復元にとどまっている。

そうしたなか 2015 年、層位確認と編年構築のための基礎データの獲得を目的としてサン・アンドレス遺跡の発掘調査を開始した。結果、イロパンゴ火山灰とボケロン火山灰という指標火山灰を軸に先古典期後期から後古典期前期にかけての良好な層位学的情報が得られた。興味深いデータとしては、イロパンゴ火山噴火後の復興過程の理解に資するデータが挙げられる。遺跡内で最も大きい 5 号建造物の基壇付近では、イロパンゴ火山灰の直上に床面が形成されているが、一方で住居址と想定される B 号建造物では火山灰と床面の間に一層存在することが明らかとなった。予察段階ではあるが、社会内部の象徴的な建造物が噴火後の復興過程において優先的に建設されることを示しているのかもしれない。

ボケロン火山の噴火に関するデータも得られている。ボケロン火山の噴火年代である後 1000 年頃には、現在のエルサルバドル一帯にメキシコ中央高原からの新しい民族集団の移

住があったと言われている。それを示す考古資料は火山灰上面から出土することから、噴火後に新たな集団が到来したことが推測される。

7. 「ネサワルコヨトル像の形成に関する一考察」

井上幸孝（専修大学）

ネサワルコヨトル（Nezahualcóyotl Acolmiztli, 1402-1472）は、「アステカ王国」を形成した三都市の一つテツココの王で、メキシコで最もよく知られている先スペイン期の統治者の一人である。しばしば彼は「詩人王（rey poeta）」などと称され、文化面において秀でた君主であったというイメージが定着している。しかし、後古典期後期の史実を見渡せば、ネサワルコヨトルには、戦争における功績や、テツココ湖における大規模土木事業の実績などがあり、現在のイメージとは異なる側面が浮かび上がる。

そこで、本発表では、征服後にアルファベットで書かれたいくつかの史料を検討し、文化王ネサワルコヨトルのイメージの源泉を探る。具体的には、編者不詳の詩歌集（『メキシコの歌』および『ヌエバ・エスパーニャの領主たちのロマンセ』）、ポマール（Juan Bautista de Pomar）の『テスココ報告書』、アルバ・イシュトリルショチトル（Fernando de Alva Ixtlilxóchitl）の複数の歴史書を取り上げて、文化面で秀でた王というイメージが形成された過程を考察する。これによって、上述の詩歌を参照しながらポマールやアルバ・イシュトリルショチトルが彼らの言説の中で宗教面や文化面を重視して記述した結果、現在流布しているネサワルコヨトル像が形成されたことが明らかになる。

こうして植民地時代前半に創出されたネサワルコヨトルのイメージが、17世紀後半以降、どうやって現代に伝わっていったかも、今後解明すべき重要な課題である。それゆえ、本発表では、植民地中盤以降のクリオーリョの歴史書にポマールやアルバ・イシュトリルショチトルがいかなる影響を与え得たのかについても、現時点での研究の進展の見通しを報告する。



写真：メキシコ市歴史地区、「三都市同盟庭園」のネサワルコヨトルのレリーフ（井上幸孝撮影）

8. 「アンデス形成期における神殿外部の儀礼空間に関する考察：カンパナユック・ルミ遺跡の事例から」

松本雄一（山形大学）

ジェイソン・ネスビット（デュレーン大学）

ユリ・カベロ・パロミーノ（ペルー国立サン・マルコス大学）

エディソン・メンドーサ・マルティネス（ペルーカトリカ教皇大学）

本発表では、ペルー中央高地南部に位置するカンパナユック・ルミ遺跡の調査によって得られた居住域における儀礼コンテキストのデータを提示し、神殿における儀礼と居住域における儀礼がどのように結びついていたかを論じる。

一般にアンデス形成期は、神殿を中心として社会が統合されていた時代であるといわれてよい。そのため現状では神殿に調査が集中しており、人々が実際に暮らした場所である居住域に関する知見は不十分といわざるを得ない。これまで住居考古学 (Household Archaeology) 的なアプローチが各地で示してきたように、居住域の調査からは生業体系や社会組織に関する重要なデータが抽出可能であるのみならず、神殿をはじめとするモニュメントで行われたものとは別種の儀礼のデータが得られることが多い。またこのような居住域における儀礼のデータからは、神殿を中心とした社会における宗教の役割を多面的に捉えることが可能となる。

このような問題意識から発表者たちは、形成期中・後期（紀元前 1000-500 年）にアンデス中央高地南部で栄えたカンパナユック・ルミ神殿の調査に際して、神殿周囲の居住域の調査を 2007 年から行ってきた。今回の発表では、特に 2013 年度の発掘において発見された居住域における儀礼コンテキストに焦点を当てる。同シーズンの調査においては、神殿の南側に位置する居住区から、直径が 5m ほどの奇妙な円形の構造物が出土した。石壁と木が組み合わされて作られており、これまで知られていないタイプの建築である。またその内部には様々な大きさの 19 個もの堅穴が見つかっており、そのうちの 4 つから人間の頭骨が発見された。さらに、4 つのうち 2 つは意図的に破壊された土器や、金製品、神殿の模型などの豊かな副葬品を伴っていた。人間の頭部を埋納するような儀礼の痕跡であると考えられる。また、埋納されたものが見つからない穴においては何度も穴を掘り返した痕跡が確認されており、この建築内に埋納された人間の頭部が掘り返され、別の場所に移された可能性が指摘できる。

絶対年代のデータからは、このような儀礼がカンパナユック・ルミ神殿が建築される以前から行われていたことが読み取れる。円形構造物の建築は神殿が作られた後に行われ、豊かな副葬品を伴う人間の頭部の埋納は、社会組織に階層化の萌芽が見られる時期に対応している。この時期に居住域で行われた儀礼コンテキストから、金製品や神殿の模型が発見されていることは、社会の階層化が生じた時期に神殿での儀礼と居住域での儀礼が結び付けられ、そこには神殿での儀礼を担っていたエリート層が関わっていたことを示唆している。神

殿の成立以前から続くローカルな儀礼伝統が、エリート層の台頭とともに神殿での儀礼に関連付けられ、人々はより一層神殿を中心としたシステムに組み込まれていったと考えられる。

9. 「先古典期マヤ文明の宗教儀礼と石器製作：グアテマラのセイバル遺跡で先古典期中期に埋納された緑色石製磨製石斧と黒曜石製石器の供物を中心に」

青山和夫（茨城大学）

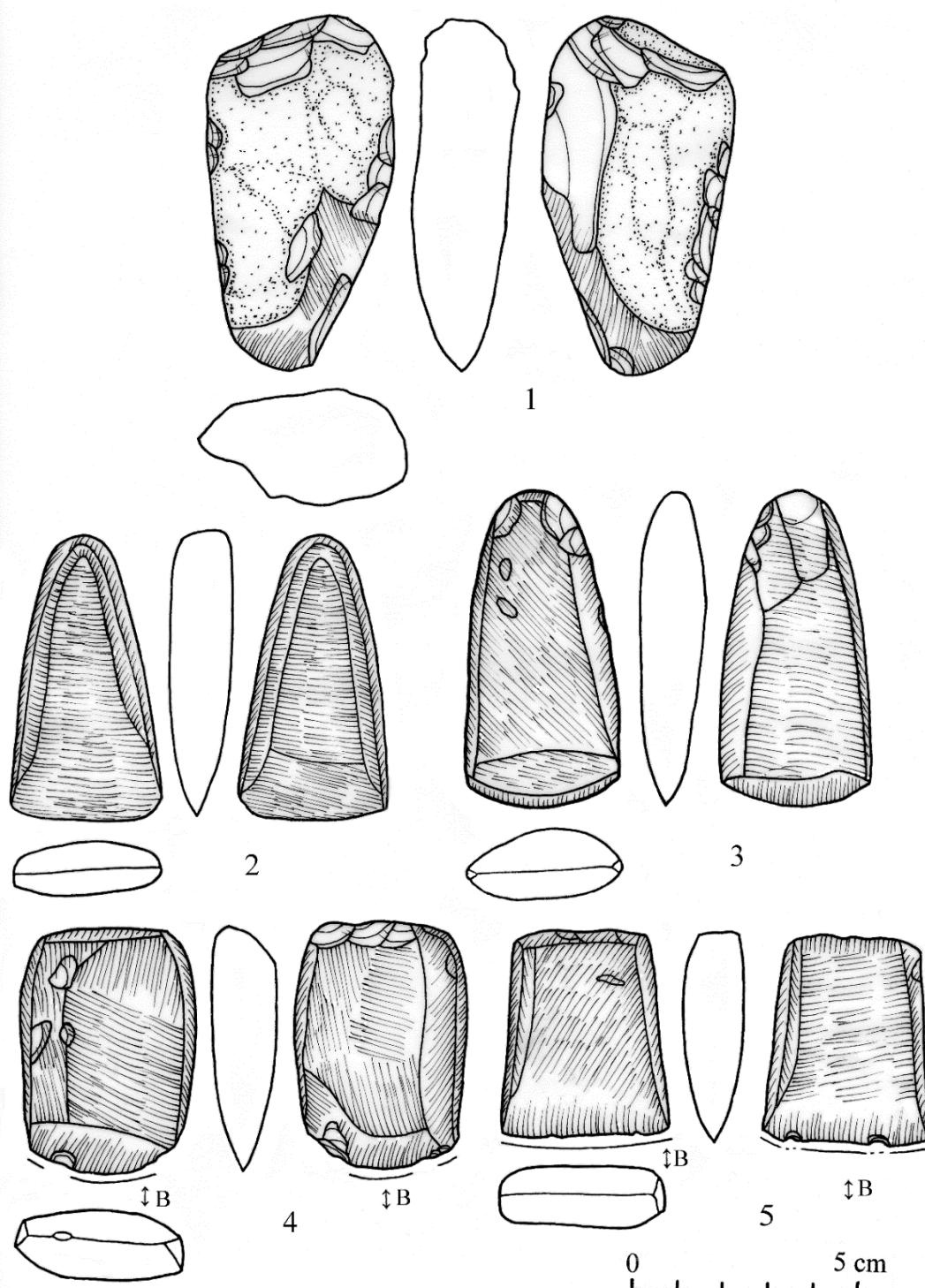
先古典期マヤ文明（前 1000～後 250 年）の起源と発展の過程は、まだよくわかっていない。とりわけ先古典期中期（前 1000～前 400 年）は、マヤ文明の起源と発展を解明する鍵となるが、その文化全般と主要利器であった石器に関するデータが不足している。王権や都市が出現する前の先古典期マヤ文明の宗教儀礼や石器製作をはじめとする具体的な人間の主体的な行為（行為者性＝エイジェンシー）に関して、発掘調査で得られた実証的な考古資料が少ない。

本研究発表では、上記の学問的な溝を埋めるために、グアテマラ共和国のセイバル遺跡における先古典期中期に埋納された黒曜石製石器及び公共祭祀で供物として埋納されたグアテマラ高地産の翡翠などの硬質の緑色石製磨製石斧を中心に、先古典期マヤ文明の宗教儀礼と石器製作の一端を実証的に検証する。現在のところマヤ低地最古の「E グループ」が、セイバル遺跡の比高 100m の丘陵上に「神聖な文化的景観」として先古典期中期前半のレアル期（前 1000～前 700 年）初頭に創設され、セイバルで最大の石斧を含む最多の緑色石製磨製石斧の供物が公共広場に埋納された。高倍率の金属顕微鏡を用いた分析法によって世界で初めて先古典期マヤ文明の磨製石斧の使用痕を分析した結果、大部分の磨製石斧が実用品ではなく埋納儀礼のために製作された儀式石器であり、使用済の磨製石斧は全て木の削りに使われていたことが判明した。

居住の定住性の度合いが異なる多様な集団が携わった公共祭祀および公共広場や公共祭祀建築を更新する共同作業は、社会的な結束やアイデンティティを固めてマヤ文明の形成に重要な役割を果たした。先古典期後期や古典期に王権を生み出し、公共祭祀を形作り巨大な神殿ピラミッドを建設する必要性を住民に納得させて物質化したイデオロギー（観念体系）は、地域間交換や戦争など他の要因と相互に作用して人口の集中や都市建設の大きな原動力になった。

先古典期中期後半のエスコバ期（前 700～前 350 年）のセイバルでは、支配層が住居で黒曜石製石刃を生産し、特別な黒曜石製石器や石刃の製作屑を住居に埋納した。先古典期中期の支配層は、古典期の支配層と同様に、権威を高めるために美術品や重要な実用品の黒曜石製石刃を生産し、ものづくりを政治的道具として活用したと考えられる。公共広場に埋葬された支配層男性には、13 点というメソアメリカの神聖な数の黒曜石製石刃および完形の石

刃残核が副葬された。セイバルの権力者は、公共祭祀において先古典期中期前半には主に緑色石製磨製石斧を公共広場に埋納したが、先古典期中期後半には支配層の墓や生け贄墓を埋葬し、高度な製作技術が窺われる完形の石刃残核をはじめとする特別な黒曜石製石器などの新たな供物や副葬品を埋納するようになった。埋納された磨製石斧や黒曜石製石器の数はマヤの重要な数字に対応し、東西南北に十字状に埋納してマヤの小宇宙を象徴した供物もあった。支配層が関わった緑色石製磨製石斧や黒曜石製石刃核などの交換、黒曜石製石刃の製作、使用と埋納儀礼に関する知識と実践は、権力の強化と王権の形成に一役買った。



セイバル遺跡の先古典期中期の緑色石製磨製石斧：1. 磨製石斧の未成品、2. 未使用の磨製石斧、3. 未使用の磨製石斧、4. 木の削りに使用された磨製石斧、5. 木の削りに使用された磨製石斧。4・5の「B」は光沢面のBタイプを、刃部の前の線は使用痕の範囲を、矢印は運動方向をそれぞれ示す。

1. 「チャルチュアパ遺跡先古典期土器編年の再検討—エル・トラピチェ地区出土土器の分析から—」

深谷岬（名古屋大学大学院博士課程前期課程）

伊藤伸幸（名古屋大学大学院文学研究科）

柴田潮音（エルサルバドル文化庁考古課）

2012 年から 2014 年にかけて行われたエルサルバドル共和国チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区の発掘調査で出土した土器の分析結果について発表する。

チャルチュアパ遺跡はエルサルバドル共和国西部に位置し、先古典期から後古典期にわたる人々の活動の痕跡が確認されている遺跡である。チャルチュアパ遺跡の土器編年は、1978 年に発表され、現在でも指標編年として広く利用されている。しかし 2014 年にはマヤ南部地域を代表するカミナルフユ遺跡の編年が、大量の年代測定データと詳細な土器分析によって再考されたことにより、マヤ南部地域の各遺跡編年の再検討が求められる状況にある。

そこで発表者らは、カミナルフユ遺跡同様にマヤ南部地域の代表的な先古典期遺跡のひとつであるチャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区で新たに得られた土器資料を用いて、既存の土器編年の見直しを行った。

本研究では、エル・トラピチェ地区の 3 基の土製マウンドに囲まれた広場に設定された複数のトレンチから出土した資料を分析対象とした。各トレンチとフラスコ状ピット等の遺構から出土した土器資料の検討を行った結果、同地区では従来の編年でいうトック期（紀元前 1200-900 年）からベック期（紀元後 200-400 年）の土器がみられることがわかった。ベック期（紀元後 200-400 年）の土器は火山灰層の上・下の両方で確認でき、イロパンゴ火山の噴火による土器タイプの大きな変化はなく、ベック期の年代も下る可能性がある。またイロパンゴ火山灰層直下のフラスコ状ピットから、カル期からチュル期（紀元前 650-200 年）の土器が出現している点なども考慮すると、チャルチュアパ遺跡の先古典期土器編年の年代が下る可能性があり、カミナルフユ遺跡の新編年とも対応することが考えられる。

2. 「トラランカレカ遺跡 2014-2015 年調査概報」

福原弘識（埼玉大学）、

ホセ・フアン・チャベス・バレンシア（メキシコ国立人類学歴史学大学）

メキシコ中央高原のテオティワカンとは、形成期終末期（前 100 年~後 150 年）ごろに都市化し、初期国家へと変遷を遂げた。一方、形成期を通じてメキシコ中央高原に発達してきた集落の大半は、この時期までに相次いで放棄された。人口がテオティワカンや Cholula と

いった大都市に集約され、その他の集落が放棄されていくこの時期の社会変動は、後 1 世紀半ばと推測されるポポカテペトル火山の噴火による自然災害が引き金になったと推測されている。形成期中期（前 1200 年～前 400 年）以降、プエブラ・トラスカラ地域において主導的な役割を果たしていたトラランカレカも、直接の被災は免れたものの、周辺地域社会の被災とその社会的混乱に連動し衰退した。テオティワカンも、衰退していったこれらの先行社会との歴史的連続性の上に成立している。中でもトラランカレカは建築様式や技術、交易網、イデオロギーといった文化要素の面でテオティワカンとの類似性を見出すことができる一方で独自性も有しており、初期国家形成のプロセスを実証的に解明するための鍵となる遺跡である。

本発表は 2014 年と本年の調査成果である。我々の調査では、遺跡の利用が開始された形成期中期から放棄された形成期終末期にかけての長期間の層位学データが不足していたため、複数の床面が先行研究で確認されている建築複合間の平坦部において、発掘調査を行った。各建築複合は独立し、その間の空間は床面があるだけの比較的平坦な空間と予想していたのだが、発掘でタルー・デスカンソ（斜壁と踊場）建築様式の壁を持つ建造物が検出され、テオティワカンのように建造物が複雑に重なる都市的空間が、予想より広範囲に広がっていた可能性が浮上した。また石彫の測量調査から、遺跡の丘陵部周縁部に神像と点描のペトログリフがセットで配置されていることが分かり、テオティワカンに引き継がれるモチーフと、その事なる利用法の存在が明らかになった。

3. 「ニカラグア共和国、マナグア湖畔の考古学調査」

長谷川悦夫(埼玉大学非常勤講師)

ニカラグア太平洋岸は、後 800 年頃のオト・マンガ語族のチョロテガ、後 1350 年頃のユト・アステカ語族のニカラオの移住によってメソアメリカ化したとされる。しかし、2000 年代に行われた太平洋岸諸遺跡の発掘調査によって、この仮説に重大な疑義が投げかけられている。新しく測定された一連の放射性炭素年代測定値が従来の土器編年と矛盾しているのである。メソアメリカで古典期終末期から、後古典期にあたるこの時期のニカラグア太平洋岸の土器編年は、ニカラオとチョロテガという民族集団の移住の年代と実態を考える手がかりとなるものであり、新大陸先史学上の大きな関心を集める。

この編年の問題を解決するために、報告者はニカラグア太平洋岸で踏査を行い、サボア期からオメテペ期と想定され、かつ未攪乱の良好な堆積を探し、土器と炭素試料を得る目的で発掘調査を行った。

昨年（2014 年）、著者はティピタパ市でチラマティーヨ遺跡を発掘し、本年はマテアレ市でラ・パス遺跡の発掘を行った。これら二つの遺跡はマナグア湖畔にある。チラマティーヨ遺跡では、大量の土器片と打製石器、二次加工によるくびれをつけた漁業用の錘と考えられ

る土器片、魚類の遺存体など、活発な人間活動と漁業に依存した生活様式が確認された。ラ・パス遺跡には、高さ約 3.5 メートル、直径約 20 メートルの大規模なマウンドが存在し、本年 8 月から 9 月にかけて行われたトレンチ発掘で床面と土留め壁と思われる石積みを確認した。いずれも、サポア期、オメテペ期に属する土器が出土している。

発表者によって行われた調査に加えて、2010 年に行われたマナグア市内のロス・マルティネス遺跡の発掘調査の結果などを考え合わせると、サポア期からオメテペ期のマナグア湖畔の遺跡には、その出土遺物や遺構に多様性が認められる。土器編年の再構築に関わる作業は未だ始まったばかりであるが、この結果は、スペイン人到来直前にこの地に栄えた先住民社会の小地域ごとの文化的多様性を映している。

参考文献

Geoffrey G. McCafferty and Larry Steinbrenner

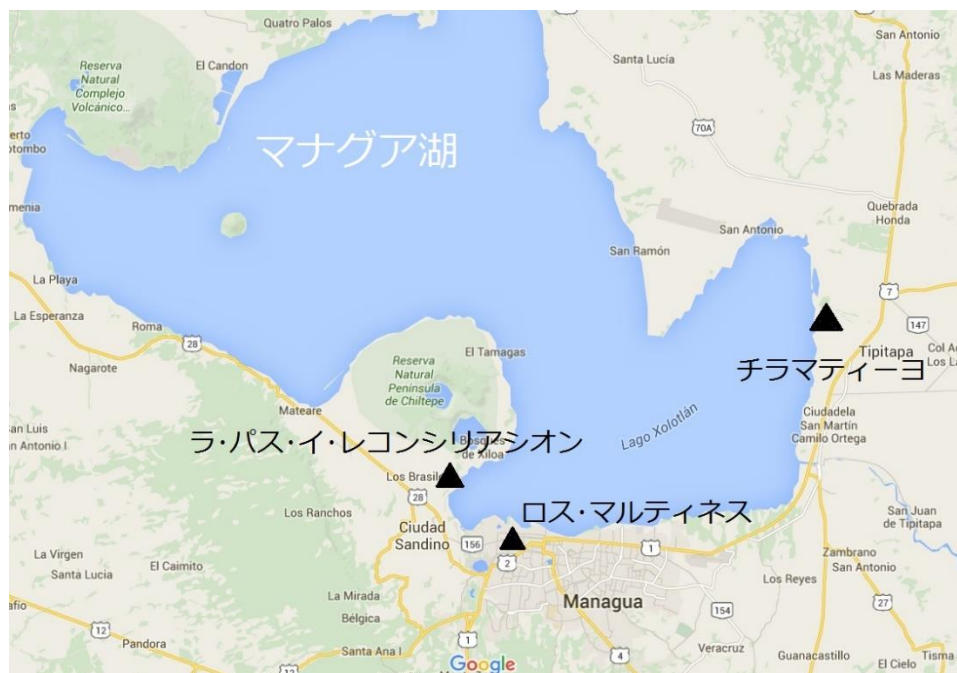
2005 Chronological Implications for Greater Nicoya from the Santa Isabel Project, Nicaragua. *Ancient Mesoamerica* 16: 131–146.

Hasegawa, Etsuo

2015 Informe de excavaciones en el sitio Chilamatillo(N-Ma-8-100), Municipio de Tipitapa, Departamento de Managua, Nicaragua. Archivo del Instituto Nicaraguense de Cultura, Managua.

Zambrana, Jorge E.

2012 Estudios arqueológicos en el sitio Los Martínez, Sector El Pantanal, Managua. Alcaldía de Managua.



マナグア湖周辺地図（Google Maps を一部改変）

4. 「GIS と天文シミュレーションソフトを利用した パレルモ遺跡の立地とランドスケープの関係分析」

佐藤吉文（京都外国語大学）

宮野元太郎（芦屋大学）

建築は、それを利用するひとびとの空間体験を意図的に操作することで、その建築をとりまく自然景観や人為的に造作された景観の中に埋め込まれたコスモロジーを身体的に経験させ、イデオロギーとして認識させる装置として機能することがある。たとえば、ティワナクの大規模建造物はそれぞれに人為的景観を創出したが、とりわけ、半地下式広場やアカパナが体现する世界の中心性と、カラササヤからの天文観測にもとづいた日蝕予測という特殊な天文学的知識はティワナクのイデオロギーを訪問者に経験させるうえで重要な役割を果たしたという。

コスモロジーを定置させる装置として建築を利用する技術は、ティワナク以前にさかのぼる。ティティカカ湖盆地に 100 を数えるという祭祀センターそれぞれにおいて、遺跡と景観、とりわけ天文学的な知識はどのような関係にあったのか？

パレルモ遺跡は、水に関わる説話をもつアプであるセロ・プカラ山の下に位置する。半地下式広場の特殊な形成プロセスや近くに沸く湧水や古代の水路跡などから、形成期後期 I の後半から（後 120 年～500 年）水神殿としての役割を果たしたと考えられる遺跡で、発表代表者が 2006 年から 2008 年にかけて調査をおこなった。遺跡から西に臨むモヨパンパ平地にはサラド川に貫かれた適農地が広がる。農耕社会では、水資源の管理と並んで季節変化の把握が社会の再生産を左右する重要な要素となる。とりわけ、朔望暦からより正確な太陽暦の移行にともなったと思われる儀礼建築の軸変化は、同時代のティワナク遺跡やコンコ・ワンカネ遺跡に認められる現象であり、遺跡の大規模化とも少なからず関連した可能性が高い。では、農耕に不可欠な水資源と密接にかかわるパレルモ遺跡において、建築と当時の星辰の運行は如何に結びついていた？

本発表では、GIS と天文シミュレーションソフトを利用して、パレルモ遺跡とランドスケープおよび天文現象との関係を検討した結果を報告する。

5. 「ペルー北部ワカ・パルティータ遺跡第 3 次発掘出土の自然遺物」

芝田幸一郎（神戸市外国語大学）

ビクトル・バスケス（アルケオビオ研究所）

テレサ・ロサレス（アルケオビオ研究所）

発表者は 2002 年以来 4 シーズンにわたってペルー北部中央海岸ネペーニャ谷のセロ・ブランコ遺跡とワカ・パルティータ遺跡で発掘を継続してきた。いずれの遺跡においても

建築の更新活動が観察され、セロ・ブランコ期すなわち形成期中期（1100-800BC）には多彩色壁画やレリーフで外壁の大半が覆われた神殿が存在し、その上にネペーニャ期すなわち形成期後期前半（800-450BC）の巨石を用いた神殿が築かれた。そしてサマンコ期すなわち形成期後期後半（450-150BC）には前述の巨石神殿は放棄されたことが判明している。複数ある調査目的の中でも、当初から一貫しているものは、地方編年、神殿更新の様態、そしていわゆる「チャビン問題」に絡んだ地域間関係の解明である。また近年は、発掘成果に基づく形で、世界観や饗宴などの新規テーマに重心を移しつつある。

今回の報告では、2013 年のワカ・パルティータ遺跡発掘調査で出土した自然遺物を扱う。ネペーニャ川下流域はペルー海岸部の中でも降雨が少ない地域の 1 つである。そのため動植物遺存体の保存状態が良好であり、これまでにセロ・ブランコ遺跡で饗宴廃棄物遺構の研究などを可能にしてきた。例えば、数ある発掘区の中で饗宴廃棄物中の獣骨だけが高い割合でイヌ（*Canis lupus familiaris*）を含んでいる現象についての議論である。ワカ・パルティータ遺跡周辺は大きな農水路などもないため、セロ・ブランコ遺跡にまして保存条件に恵まれている。本発表では、これまでの両遺跡の自然遺物分析をベースに、上記イヌ骨に関する議論を補強することになるデータなど最新の分析結果を加え、今後の研究、特に饗宴や神殿更新といったテーマにおける展望を示したい。

6. 「ヘケテペケ川中流域第 7 次調査：モスキート平原の形成期早期遺構の分布とその多様性」

鶴見英成（東京大学）

カルロス・モラーレス（ペルー文化省）

申請者は 2009 年より、ペルー共和国カハマルカ県のヘケテペケ川流域南岸モスキート平原にて発掘を開始し、形成期早期（先土器期末期、紀元前 2000-1500 年）に大規模公共建築群が築造されていたとの見通しを得た。2015 年度は平原全域の遺構の分布を把握し、その性質、および編年上・機能的な関係を解明すべく、26 の地点に試掘坑を設定し発掘を進めている。調査は 10 月下旬完了予定で、現時点ではその全容を示すことは出来ないが、形成期早期に対応するとみられる大規模公共建築群、耕作テラス、用水路、岩絵など多様な遺構を検出している。本発表では主としてそういったフィールドデータの概要を提示する。

用水路は平原南東部から北西部にむけて合計約 1.2km、ほぼ一直線に続いている。ただしそのすべてが一続きなのではなく、いくつかの区間に区分され、流向も一方向ではなかったとみられる。その北側には用水路に沿うように不定形のマウンド群が連なる。また用水路の南側には谷に向けて最長 130m の細長いマウンド群が 4 地点で確認されており、それに沿って支線のように水が平原を下ったと見られる。これらの水路に囲まれるように高

さ 50cm 程度の壁に支えられた不定形の耕作テラスが多数配置されている。モスキート平原は地表から地下まで多数の礫を含むが、耕作土とみられる土層には礫がきわめて少ない。いっぽうで上記の不定形マウンド群は礫を主体に築造されている。また耕作地の中には、直線的な外壁で囲まれた、公共的建築と想定される小規模な基壇群も配置されており、マウンド群ほどではないが多くの礫を含む。こういったことから、耕作地の除石と大規模建築の築造が同時に進行した事がうかがわれる。このようなデータを提示しつつ、モスキート平原における形成期早期の土地利用の特徴について、またヘケテペケ川流域における大規模な土地利用の開始について、現時点での仮説を述べる。

7. 「同位体分析によるラクダ科動物飼育の検証：ペルー北部高地パコパン パ遺跡の事例」

瀧上舞（山形大学）

鶴澤和宏（東亜大学）

関雄二（国立民族学博物館）

ダニエル・モラーレス（ペルー国立サン・マルコス大学）

米田穰（東京大学）

アンデス地域で大型家畜として知られるラクダ科動物（リャマとアルパカ）は古期（紀元前 5000 年-3000 年）にペルー中部のフニン高原で家畜化が起こり、アンデス各地に広がった。その飼育の目的や拡散の時期や経路について多くの研究者が注目している。ペルー北部高地は、元々野生のラクダ科動物（グアナコとビクーニャ）の自然分布外であり、形成期（紀元前 3000 年-後 1 年）に伝播してきたと推測されている。パコパンパ遺跡では PC-I 期（形成期中期：紀元前 1200-800 年）のラクダ科動物の出土は少ないが、PC-II 期（形成期後期：紀元前 800-500 年）になると出土数が増加し、ラクダ科動物の存在が顕著になる。ペルー北部高地では形成期後期にラクダ科動物の需要が高まったと推測されているが、飼育環境や利用目的には不明な点も残っている。

近年、動物骨の科学分析を行う同位体生態学的研究でラクダ科動物の飼育を明らかにする試みがアンデス各地で行われている。本研究ではパコパンパ遺跡から出土したラクダ科動物とシカの歯のエナメル質を用いてストロンチウム同位体と酸素同位体、炭素同位体の分析を行い、パコパンパ遺跡に存在したラクダ科動物の飼育環境を推定した。

分析の結果、パコパンパ遺跡で出土したラクダ科動物は、シカと似た生態環境で生育していたこと、また幼獣から成獣に育つ過程で生育地域に大きな変化はなかったことが示された。すなわち、シカの生息地域の範囲外から移入された証拠は示されなかった。さらに、形成期後期のラクダ科動物の多くが C4 植物を摂取しており、パコパンパ遺跡の高地の立地環境を考えると、栽培化された C4 植物（おそらくトウモロコシ）が利用され

ていたと推測される。これらの同位体データから、形成期後期にはパコパンパ遺跡を利用する集団によりラクダ科動物が飼育されていた可能性が示唆される。

8. 「ペルー北高地パコパンパ遺跡における「ヘビ・ジャガー神官の墓」の発見」

関雄二（国立民族学博物館）

フアン・パブロ・ビジャヌエバ（ペルー国立サン・マルコス大学）

ダニエル・モラーレス（ペルー国立サン・マルコス大学）

本発表では、ペルー北高地パコパンパ遺跡において、国立民族学博物館・ペルー国立サン・マルコス大学合同調査団が本年 9 月に発見した墓（登録番号 15P-B2-Entierro 541、通称「ヘビ・ジャガー神官の墓」）について概要を報告するとともに、被葬者の社会的地位について考察する。既述の墓が発見されたのは、パコパンパ遺跡第 3 基壇に位置する北基壇上であり、編年上、第 II 期（B.C.800～B.C.500 補正後）にあたる。北基壇は、半地下式広場の北に位置し、広場の西に位置する中央基壇、南に位置する南基壇とともに、いわゆる U 字形の配置を示す建築群の一翼を担う。北基壇上には、一辺 12m の方形半地下式パティオが建設され、その東壁の外側で墓は検出され、被葬者はパティオにおける儀礼と関係した人物であることがうかがえる。

墓の切り口は直径 55cm の円形ながら、底部の径は 85cm あり、洋梨状の地下式墓である。深さは約 96cm で、これまでに発見された土壇墓の大半が深さ 30cm 前後であることを考えると、被葬者の扱いに特殊性が認められる。事実、中央基壇で 2009 年に発見された通称「パコパンパ貴婦人の墓」（09PC-C-Entierro 09-02）同様に、被葬者を安山岩の板石で覆った後、土と大型の石で封印していた。

二体の被葬者が検出されたが、性別や年齢は自然人類学的分析を待たねばならない。いずれも東西方向に横臥屈葬状態で埋葬されていたが、頭位方向は反対で、対称性が意識されていた。西に頭位を向けた一体にはヘビの胴部とネコ科動物の頭部を象った黒色鍔形土器 1 点が置かれ、東に頭位を向けた一体の頸部付近からは、金製の首飾りが出土した。首飾りは涙形のペンダントトップを中心に計 31 個の球形飾り玉よりなり、同じ北高地に位置するクントゥル・ワシ遺跡のコパ期の墓で発見された首飾りと類似する。

近年のアンデス考古学では、形成期後期に宗教的指導者が権力を掌握し始めたことが提示されており、今回発見された墓も社会的差異の確立を示唆する証拠としてとらえることができる。

9. 「パコパンバ遺跡の儀礼的コンテキストから出土した動物骨資料：饗宴行為の動物考古学的復元」

鵜澤和宏（東亜大学）

フアン・パブロ・ビジャヌエバ（ペルー国立サン・マルコス大学）

長岡朋人（聖マリアンナ医科大学）

関雄二（国立民族学博物館）

ペルー北部高地、パコパンバ遺跡の儀礼的コンテキストから検出された動物骨について報告する。第1基壇中心部で検出された饗宴の痕跡と考えられるコンテキストには同定標本数（NISP）2,411 点の動物遺存体が含まれていた。このうち 794 点が科・種・属レベルで同定できた。最優占種はオジロジカ（41.2%）であり、ラクダ科（37.5%）とあわせた偶蹄類が資料の約 80%を占める。この他にテンジクネズミ属（11.6%）、ヒト（5.5%）、ワタオウサギ属（2.9%）、イヌ（1.3%）、オポッサム（0.3%）など 7 種が確認された。本資料にはコパンバ遺跡で利用された動物の大半が含まれており、遺跡周辺あるいはその交易圏から調達できる動物を集めて儀礼が行われたことが推定される。

最優占種であるオジロジカの、歯牙萌出・咬耗状態から推定される年齢構成は幼獣 11 個体、成獣 1 個体であり老獣は含まれない。なお幼獣には、誕生間もない新生獣 1 体が認められた。ラクダ科については年齢推定可能な標本が少ないが、幼獣 2 個体、成獣 1 個体が確認され、シカと同様、幼獣が利用の主体であった。

同定されたすべての分類群において解体痕が観察された。とくに偶蹄類においては、剥皮・解体・肉の切り取りにともなう切創が観察され、長管骨は破碎されて骨髓が採取されている。熱による骨表面の変成を認める標本も高頻度であり、いずれも饗宴における *feasting meal* として消費されたものと判断される。また骨表面にはイヌ、ネズミによる食痕が高い頻度で観察された。とくに骨端部に集中しており、関節軟骨の付着部だけが嚙り取られている例もある。

こうした骨資料の特徴から、生息地の異なる動物が、饗宴にあわせて神殿に搬入されるようあらかじめ計画されていたこと、饗宴後は食べ残こした骨がしばらくのあいだ放置されていたことなどが示唆される。

10. ペルー北海岸におけるパブリック考古学の研究

ダニエル・ダンテ・サウセド・セガミ(国立民族学博物館外来研究員)

本研究の目的は、南米アンデス海岸地帯における先スペイン期の遺構や遺物の保存と活用をめぐる複数のステークホルダー間の対立に注目し、それぞれが保有する文化遺産への関心や観点を析出し、対立の要因を探ると同時に、それらの間の利害関係の調整を可能にする実践的手法の模索を通じて、様々な立場で遺跡に関わる人々が望ましい関係を構築していくための展望を得ることである。

発表者が博士号を得るために本研究を行い、ペルー共和国北部海岸のランバイエック州フェレニャップフェ郡において7年間（約13ヶ月間）の現地調査を行い、参与観察、インタビューおよび文献渉猟にもとづき本論文に必要なデータを収集している。本地域に存在する巨大な遺跡に関わる考古学者とコミュニティの調査活動や保存運動、遺跡周辺で暮らす農民の生業活動などを調査し、とくにそれぞれのアクターが抱える歴史観の相違とそこから生まれる社会的コンフリクトに注目しつつ、それを乗り越える共生のモデル構築を目指した。

ペルー北部海岸の遺跡の保存に関しては、様々な問題が横たわっている。スペイン人による植民地期から現在に至るまで、この地域では金銀製品や土器を中心とした盗掘が一般的に行われてきた。しかしながら近年では、都市や農地の拡大が問題をより複雑にしている。土地問題や土地利用に関するコントロールが、政府機関や地方自治体、地主を含む様々なアクター間の対立を引き起こしており、このようなコンフリクトにさらされて遺跡は破壊されている。この問題を前にして、企業や考古学者の支援を受けたペルー政府は、地元農村における生活の質を改善し、住民が遺跡を「考古遺産」として保護することに関心を抱くよう、観光事業を推進している。この目的を達成するために、博物館展示やパンフレットの配布、講演会、NGOの開発プロジェクト、学校教育プログラムを含む様々な方法が用いられている。しかし、これら政府の主導にもかかわらず、考古学遺跡や遺物は未だ破壊され続けている。考古学者たちはこの原因を、住民が価値を理解していないことや、教育不足にあると捉えてきた。

発表者の研究では、地元住民が遺跡の価値づけや考古遺産の定義を自ら行っていないことに遺跡破壊の原因があるという仮説を提示した。現在、ペルーにおける「考古遺産」の定義は、考古学者の視点しか含んでおらず、一般市民の視点が置き去りにされている。そのため、地元住民にとっては、外部からの概念が押し付けられている状況となっており、考古学者や政府側の意図とは異なる方法で利用されるのである。この仮説を検証するために、視覚的表現、コミュニケーションメディアに見られる情報の分析と集成、参与観察、ステークホルダーの同定、ランダムなインタビューなどの調査方法を通して、この地域における遺跡の様々な利用方法を特定することができた。

11. 「アンデス形成期パコパンパにおける饗宴」

中川渚（総合研究大学院大学博士課程）

フアン・パブロ・ビジャヌエバ（ペルー国立サン・マルコス大学）

関雄二（国立民族学博物館）

ダニエル・モラーレス（ペルー国立サン・マルコス大学）

アンデス形成期（紀元前 2500 年から紀元前 200 年）は、土器や公共建造物が出現し、遠距離交易が活発化する時期であり、階層化が始まる社会であるとされる。アンデス北部山地に位置するパコパンパ遺跡はこの時期の祭祀センターであり、金製品を伴う墓が検出されるなど、階層化の痕跡が認められている。本発表では、2014 年にパコパンパ遺跡の土器集積から出土した土器の分析成果を提示し、饗宴について論じる。饗宴は、特別な機会に特別な食事や飲み物を分かち合う行為とされる。特に主催者が多くの人に食事や飲み物をふるまう場合、主催者とゲストとの関係が対等ではなくなることから、権力の生成や社会の階層化との関連で論じられることが多い。権力や階層化の出現期と考えられるアンデス形成期では、その発生プロセスを解明する鍵として、重要なテーマの一つに位置づけられている。

2014 年の発掘調査では、第 3 基壇の広場北側に位置するパティオ内から約 800kg もの大量の土器が集中した状態で検出された。この土器集積には、半完形土器や完形土器も多く含まれている。この中から層位的により集中度の高い箇所を抽出し、5298 点、104.5kg 分の土器を分析した結果、同遺跡における他のコンテキストとはタイプ構成、器形構成が明らかに異なっていることが判明した。完形・完形土器、口縁部の割合も埋土に比べて高い。器形は主に大型壺と鉢に二極化しているほか、動物や人間の顔を模した Mascara のタイプが比較的残りの良い状態で見つかっている。大量の食事を準備する大型壺と提供用の鉢がほとんどであること、儀礼と関わるような Mascara タイプが見つかっていること、他時期の土器の混入が極端に少ないこと、半完形・完形のほか口縁部や底部など、他のコンテキストでは少ない重要な部位の出土がほとんどであり、この層に張り付いたような状態で検出されたものもあることから、この土器集積が饗宴による結果形成されたもの、特にパティオ内で行われ、そのまま廃棄されたものと考えられる。

パコパンパで発見されたこの饗宴のコンテキストは、金製品を伴う墓が造られるようになるパコパンパⅡ期のものであり、パコパンパにおける権力生成、階層化と密接に関わっていた可能性が高い。Mascara の図像やタイプ構成から、饗宴の性格はこれまでに確認されているアンデス形成期の他の遺跡のものとは異なり、パコパンパ特有の動機によるものと推測される。また、先行研究で報告されている饗宴の痕跡は、饗宴で使用したと見られる土器や道具類がその後別の場所で廃棄され、形成された遺構であるのに対し、パコパンパで検出された土器集積は、パティオ内で饗宴を行ったそのままの状態で放棄されたものと考えられる。以上から、パコパンパ内での権力の発生プロセスだけでなく、その様相を他

地域と比較する上でも貴重なデータである。

12. 「ペルー、パコパンパ遺跡から出土した人骨の生老病死の復元」

長岡朋人（聖マリアンナ医科大学）

森田航（北海道大学）

関雄二（国立民族学博物館）

鶴澤和宏（東亜大学）

フアン・パブロ・ビジャヌエバ（ペルー国立サン・マルコス大学）

マウロ・オルドーニェス（ペルー国立サン・マルコス大学）

ディアナ・アレマン（ペルー国立サン・マルコス大学）

ダニエル・モラーレス（ペルー国立サン・マルコス大学）

パコパンパ遺跡は、ペルーの北高地、カハマルカ県チョタ郡に位置する形成期（2500～1100 BC）の祭祀遺跡である。本研究の目的は、2005～2014 年度のパコパンパ遺跡の発掘で出土した人骨を調査し、個々の出土人骨の鑑定結果の記載と基礎データを提示し、生物考古学的な考察を行うことである。その結果、(1) 頭蓋、下顎骨、歯が残る 70 体の年齢構成は、24 体（34.3%）が 14 歳以下の未成年、46 体（65.7%）が 15 歳以上の成人であった。46 体の成人のうち、性別判定ができた 38 体の男女比は 15 : 23 であり、性比は女性に偏っていた。未成年のうち、24 体中 20 体が 0 歳であった。簡易生命表によると、0 歳以降の生存率は、5 歳に至るまで 23.4%が死亡、15 歳までに 28.1%が死亡した。また、0 歳時平均余命は 25.0 歳、15 歳時平均余命は 21.3 歳であった。(2) パコパンパ遺跡出土人骨の推定身長は、6 体の男性の平均が 160.2cm、14 体の女性の平均が 150.0cm であった。

(3) パコパンパ遺跡の永久歯には 738 点中 137 点（18.6%）に齲蝕を認め、そのうち男性は 339 点中 63 点（18.6%）、女性は 399 点中 74 点（18.5%）であり、男女間に有意差はなかった（ $P>0.05$ ）。(4) 成人男性 1 体、成人女性 2 体の頭蓋に前後型の人工頭蓋変形を認め、いずれも後頭部が平らにつぶれており前後に寸が詰まっていた。(5) 骨折は 5 体の人骨に認め、そのうち陥没骨折は 2 体の女性と 1 体の男性に、四肢骨の骨折は 2 体の男性に認めた。また、1 体の女性に脱臼を、1 体の男性に頭部離断に伴うカットマークを認めた。これまでパコパンパ遺跡から出土した人骨からは、骨折、脱臼、殺傷痕が認められており、外傷を持つ 7 体は出土した成人骨全体の 1 割強の頻度を占める。骨折や脱臼はいずれも治癒痕を伴うもので致命傷にはならなかったが、正常な人体構造の障害によって生活に支障を伴うものであったと想像するに難くない。(6) ストレスマーカーの指標としてクリブラオルビタリアの頻度を算出した。その結果、右眼窩では 21 例中 3 例にクリブラオルビタリアを認め（14.3%）、左眼窩では 20 例中 2 例にクリブラオルビタリアを認めた（10.0%）。クリブラオルビタリアは、慢性的な鉄欠乏性貧血を原因とする骨髄の増殖とそ

れに伴う骨変化である。鉄欠乏性貧血は遺伝的にも後天的にも引き起こされるが、遺伝的な貧血は地中海地域に限定されるきわめてまれな症例であるため、本症例は栄養障害や寄生虫感染によって引き起こされたと考えられる。また、クリブラオルビタリアを認めた個体のうち、2 例には陥没骨折や殺傷痕を伴っていた。クリブラオルビタリアが暴力を受けた個体に集中していたことは、犠牲者の生前の生活には慢性的な栄養障害などがあったことを示す。これは、ストレスマーカーと外傷の関係を示す興味深い症例である。

13. 「古典期マヤの都市間ネットワーク：エル・パルマール遺跡の調査成果から」

塚本憲一郎（日本学術振興会/青山学院大学文学部史学科 特別研究員 SPD）

本発表は、2007 年から 14 年まで実施したエル・パルマール遺跡の調査成果を基に、古典期（後 250 - 900 年）マヤにおける都市間ネットワークを復元する。

エル・パルマール遺跡は、メキシコ合衆国カンペチェ州南東部に位置する。この地域はさまざまな政治・文化領域が交差している。例えば、遺跡の北方にはツイン・タワーの建築様式で有名なりオ・ベック地域、南方にはティカルを代表とするペテン地域が広がっている。西方には、古典期マヤ最大の都市であるカラクムル、中規模都市では、南にリオ・アスル遺跡、南東にラ・ミルパ遺跡などが存在する（図 1）。後 378 年以降、マヤの二大王朝であるカーン（蛇）とティカルの覇権争いが激化するに従って、諸都市間のネットワークも複雑化したと考えられるが、今日までそれを復元するには至っていない。発表者は、政治領域の境界上に位置していた都市の中で最大の規模を誇るエル・パルマールが本格的に調査されていなかったことに、その原因があると考えている。

これまで 5 期の調査によって、エル・パルマール遺跡は 10 平方キロメートルの範囲に広がり、中心部とその周りに散在する 8 つの周縁建造グループ群から構成されているのを明らかにした。その中で、中心部と 3 つの周縁建造グループを含む約 100 ヘクタールの範囲を測量した。中心部では、高さ 30 メートルに達する 2 基のピラミッド神殿、その間にある人口の貯水池、約 100 基の建造物群、宮殿、球技場、サクベとよばれる堤道、そして 8 つの広場の存在を明らかにした。さらに中心部において 50 体の石造記念碑を記録し、周縁部の建造グループにも石碑や碑文階段などを発見した。

調査成果によって、エル・パルマールは、都市間ネットワークを通じて異なった地域の特徴を取り入れながら発展した都市だと判明した。遺跡図から判断すると、エル・パルマールはペテン地域の特徴を有しつつも、キンタナロー州南部やベリーズ地域の遺跡群にみられるセトルメントパターンに類似しているのがわかる。発掘によって出土した土器は、後 400 年頃からリオ・ベック地域の土器の特徴を共有しながらも、高地の火山灰を混和剤として採用している。PIXE（粒子線励起 X 線）による黒曜石の分析は、グアテマラ高地を原産地と

同定している。

石造記念碑に刻まれたマヤ文字の解読によって、さらに広範囲のネットワークを復元できた。まず、エル・パルマールの王朝史の一部である、後 554 年から 820 年に統治していた 12 人の王を特定した。彼らを含む王族の称号を解読すると、他の王朝とは異なり、王族の間で異なった称号を使い分けていた事実が明らかとなった。

これらの成果を他の都市群から出土した遺構や遺物と比較すると、エル・パルマール王朝のネットワークは、カンペチェ州南部地域内だけではなく、ウスマシンタ地域、キンタナロー州南部地域、ペテン地域、ホンデュラスのコパン地域などの広範囲におよんでいたと推測される。

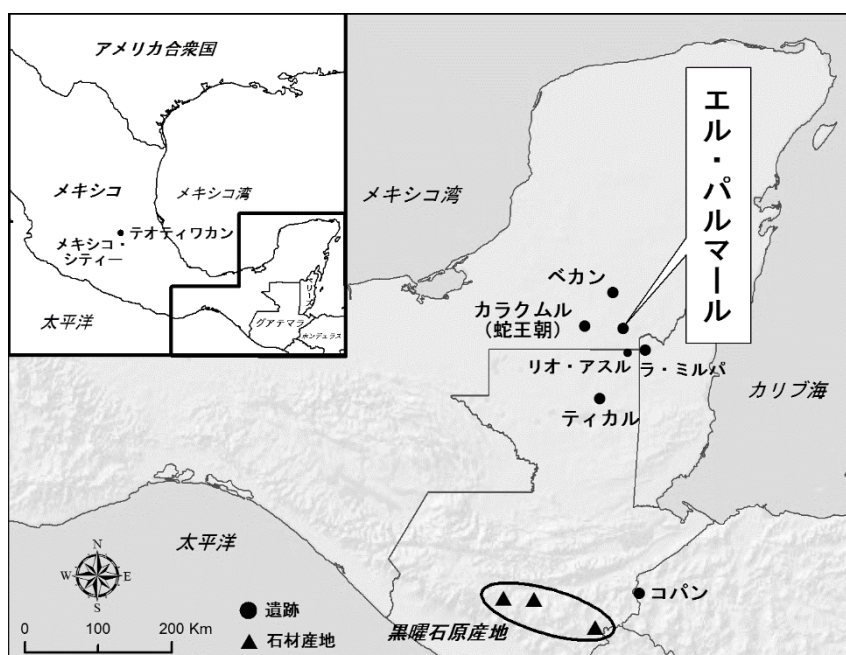


図 1. エル・パルマール遺跡と関連遺跡

14. 「鍊金術とインカ表象：「太陽神」表象をめぐって」

大平秀一（東海大学）

学術書・論文・博物館展示、そして一般社会の多様なメディアにおいて、太陽・「太陽神」はインカ表象の中心を織りなす要素となっている。アンデス先住民社会は無文字社会であったため、この表象の源泉はもちろんクロニカに求められる。インカにおける「太陽神」の記述は、フランシスコ・デ・ヘレス、ミゲル・デ・エステーテ、クリストバル・メナといった「発見」・「征服」期の記録においてすでに認められる。そして 16 世紀半ば過ぎになる

と、シエサ・デ・レオンやフアン・デ・ベタンソスらが、「太陽神」をめぐる信仰や太陽神殿に関して、章を設けて一層システマティックに記述するようになる。クリストバル・デ・モリーナ（デル・クスコ）は、ヴィラコチャ・太陽神・雷神をあたかもインカの三大神のごとく記している。17 世紀に入ると、インカ・ガルシラソ・デ・ラ・ベガやベルナベ・コーボらが、「太陽神」や太陽神殿に関する情報を一層詳細に書き著し、加えて先住民のパチャクティ・ヤムキ、ワマン・ポマは、太陽や月の絵・図を伴った記録を残している。特に、ポーマの描いたインカと関わる多くの絵には、太陽や月の表象が組み込まれている。征服以後 200 年も経ると、インカと太陽は、相互に切り離し得ないシンボルと化し、残されたインカ王の絵画には太陽の表象を伴うものが多く認められる。

クロニカのみを単純に比較・検討すると、インカにおける唯一神・「太陽神」の存在に疑問を挟むことは困難である。しかしながら、他の資料の状況は、必ずしもクロニカの記述を支持するわけではない。例えば、偶像崇拜根絶を目的として、先住民の信仰体系・儀礼的世界をまとめているパブロ・ホセ・デ・アリアーガの報告書には、太陽神をめぐる記述は限定的であり、上述したクロニカのように強調もされていない。また同じ目的でフランシスコ・デ・アビラが、先住民に語らせ、先住民書記にケチュア語で書き留めさせた「ワロチリの神話」では、クロニカと同質的な「太陽神」をめぐる語りはなされていない。そして、スペイン侵入以前の物質文化／考古資料には、ポーマやパチャクティ・ヤムキが描き表わしているものと同質の太陽や月の表象・図像が、一切認められない。さらに現代の民族誌においても、「太陽神」をめぐる信仰体系は、まったくといってよいほど採取されたことがない。以上の状況に加えて、16 世紀にスペイン人たちが他地域で書き残した文書における「太陽神」の記述と、インカの「太陽神」の記述を比較すると、一部にしる類似性を読みとることも可能である。

本発表では、記録を残した側（スペイン／ヨーロッパ）の社会・文化における「太陽」／「太陽神」の位置づけに着目し、インカの「太陽」／「太陽神」の表象と比較・検討したい。結論として、ヨーロッパの錬金術・ヘルメス思想が、インカ像・インカの「太陽神」表象に、大きな影響を与えていることを指摘したい。